

J.S.バッハの作品 (鈴木大介編)

プレリュード ニ短調 (リュートのためのプレリュード BWV999)

バッハの貴重なリュートのための小品で、作曲年代は定かではないがケーテン宮廷楽長時代のものと推定されている。二分弱の短い曲で、曲自体は《平均律曲集 第1巻》第1番のプレリュードと同じくアルペジオで進行する。ギターやピアノに編曲されて演奏されることが多いが、その際には演奏時間がさらに短くなる。

フーガ イ短調 (リュートのためのフーガト短調)

本曲は、バッハの「無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第1番」の第2楽章をバッハ自身がリュート用に編曲したもの。主題が非常に印象的な堂々としたフーガは、楽器が替わっても減じることのない音楽性を示してくれる。

ソナタト短調 (無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第1番)

バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》(全3曲)は1720年以前、ケーテン宮廷楽長時代前半の所産とされる。原曲である「ソナタ 第1番」の第1楽章アダージョは、荘重な雰囲気の中重音を多用した旋律が淀みなく流れる。第2楽章にはバッハの真骨頂というべきフーガが置かれ、牧歌的な第3楽章シチリアーナ(シチリアの民俗舞曲)を経て、第4楽章プレストでは単旋律が無窮動的に疾走する。

パルティータ ニ短調 (無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番)

「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番」の演奏機会が際立って多いのは、ひとえに第5楽章に置かれた「シャコンヌ」の魅力による。第4楽章までは、伝統的舞曲の定型配置で進み、全体のボリュームとしてはこれらが前半に相当する。そして後半を占めるのが、3拍子系の古い舞曲を出自とするシャコンヌである。シャコンヌの圧倒的な規模、美しさ、崇高さには本曲集の真価が集約されているといっても過言ではない。冒頭で呈示される8小節の主題は、4小節ずつ前後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、その8小節の主題がさらに30回にわたって変奏される。舞曲という枠組みをはるかに超えた音による壮大な建築物ともいえる世界が形づくられていく。

前奏曲、フーガとアレグロ

1740～45年頃の作で、当代随一のリュート奏者であったシルヴィウス・レオポルト・ヴァイスとの親交から生まれた。前奏曲、フーガ、アレグロからなり、簡素化されたソナタのような構成となっている。リュートまたはチェンバロのための曲で、低弦の動きに撥弦楽器の妙を生かした響きを聴くことができる。